

書評

Tomoko Sato, *Emily Dickinson's Poems: Bulletins from Immortality* (Shinzansha Publishing Co., Tokyo, 1999)

佐々木肇

1999年8月12日から4日間にわたって、“Emily Dickinson at Home”と題して、Massachusetts 州 South Hadley の Mount Holyoke College で Emily Dickinson International Society の第3回大会が開催された。この大会には、16ヶ国から155名の研究者が集まり、日本からも10数名が参加した。日本からの参加者の1人が、佐藤智子さんであった。Emily Dickinson は South Hadley の隣り町 Amherst で、1830年に生まれ、1886年にこの世を去るが、彼女の生前に発表された詩は匿名のわずか10編で、詩人として世に知られることがまったくなかった。Mount Holyoke College はアメリカ最古の女子大学で、Emily Dickinson は、この大学の前身である Mount Holyoke Female Seminary で1年間学んだ。

Emily Dickinson International Society の第3回大会を、“Emily Dickinson at Home”と呼んだのも、彼女がこの学校を去ってから151年後に、再び母校に戻ったという意味を込めてであった。しかし、生前匿名で、しかも、彼女の承諾もなしに10編の詩が発表されただけの Emily Dickinson は、彼女の詩が世界中で読まれ、研究の対象となり、こうして母校に5つの大陸から、155名もの研究者が集うなどとは思ってもみなかったであろう。

ところで、佐藤さんも著書の中で述べているように、Emily Dickinson の詩稿は、彼女の死後妹の Lavinia によって発見され、Thomas W. Higginson と Mabel L. Todd を編纂者として、1890年に初めて出版された。その後二人の編纂者は、第3シリーズまで Dickinson の詩を出版するが、Dickinson のすべての詩が出版されたのは、20世紀の中葉であった。それ

が1955年に出版された Thomas H. Johnson 編纂の3巻からなる *The Poems of Emily Dickinson* であり、全部で1775編の詩が収録されている。この Johnson 版により Dickinson の詩作の全貌が明らかになり、彼女がアメリカ文学史上最高峰に位置する詩人として評価されることになった。しかし、この Johnson 版は、Emily Dickinson の原稿を忠実に再現したものではなく、出版当初から多くの不備が指摘されていた。

それらの不備を補うべく、1981年になって、Ralph W. Franklin 編纂の *The Manuscript Books of Emily Dickinson* (2 vols.) が出版され、さらに1998年、同じ編纂者によって“fascicle”(原稿を綴じた小冊子)の徹底的な検証が行われた後、3巻本の *The Poems of Emily Dickinson* が出版された。この Franklin 版の Dickinson 詩集には、原稿校閲の結果1789編の詩が収録され、現在ではこの版が決定版と考えられている。

佐藤智子さんは、大学院時代から一貫して Emily Dickinson 研究に取り組み、大学院在学中に1年間 Emily Dickinson の母校の Mount Holyoke College に留学している。その後、Dickinson が生まれ育ち、その55年の生涯のほとんどを過ごした町 Amherst にある Amherst College でも研究生活を送った。Emily Dickinson が母校を離れた151年目の年に、佐藤智子さんが、これまで彼女が発表してきた研究論文を1冊の本にまとめ、彼女自身も“Back at Home”として母校での Emily Dickinson 研究の国際大会に出席できたことを、著書の出版と同時に、同僚の一人として、心から祝意を表したい。

Emily Dickinson の研究者の数は、アメリカについて日本が多いとされている。日本では、Dickinson の詩の翻訳や、彼女の伝記、そして研究書がいくつも出版され、研究論文も数多く発表されている。また、「日本エミリー・ディキンソン学会」も存在する。しかし、わたしの知るところでは、日本で出版された Emily Dickinson の研究書で、すべて英文で書かれたものは今までなく、佐藤智子さんの *Emily Dickinson's Poems: Bulletins from Immortality* が最初の1冊である。その意味でも、この本は日本での Emily Dickinson 研究の水準を世界に知らせる重要な1冊となろう。Emily Dickinson のスペシャルコレクションがあるハーバード大学の図書館にも2冊おさめられたということなので、その機会は当然増すことになるであろう。

日本での英米文学もしくは英語学や言語学関係の研究論文の多くは、現在

でも日本語で発表される場合が多い。しかし、外国の研究者と同等な立場に立って、対等に研究を進め、研究協力をしたり、討議を行うという点から考えると、やはり英文での研究発表が望ましい。佐藤智子さんは、日本の大学院での指導教官のお二人がいずれもアメリカ人の教授だったということもあって、研究論文を英文で発表し始めた。しかし、その後も終始一貫して、Emily Dickinson について英文で論文を発表し続けてきているということは、佐藤さんが世界に通用する研究、世界中の Emily Dickinson 研究者を視野に入れて研究を続けているからだといわたしは受けとめ、佐藤さんの勇気と意欲にも敬意を表したい。

佐藤智子さんの *Emily Dickinson's Poems: Bulletins from Immortality* は、222 ページからなり、これまで彼女が発表した15編の研究論文が収録されている。それらの論文は、論点や内容によって全体が4章に分類されているが、いずれの論文も、Dickinson 自身にとって大きな主題の一つであった“immortality”という語がその根底にあり、それが佐藤さんがこの著書の副題に *Bulletins from Immortality* とつけたゆえんであろう。

第1部（本書ではI）は“TO HANG OUR HEAD—OSTENSIBLY”と題され、3編の論文が収録されている。なお、4つの章のいずれも、Dickinson の詩の中から取られた語句が題名として用いられている。

Emily Dickinson は1850年代に入ると、外部との物理的な接触を絶つようになり、孤高の生活を送った。そういう彼女であったが、実は19世紀のアメリカ社会における女性の状況を冷徹な目で観察し、自己の存在を凝視していた。当時のアメリカには、しだいに物質文明が浸透し、宗教も形骸化して、教会の礼拝に出席してもこれみよがしに頭だけは下げるという気風が蔓延しつつあった。そのような物質主義、世俗化という風潮の中にあって、自分は何なのか、生きるということはどういうことなのか、神は存在するのだろうか、といったことがらについて思索し、苦悩する Dickinson の姿を、佐藤さんは詩の精緻な読みによって考察している。神は「寛大で慈悲深いのだろうか」と問う Dickinson が、彼女の詩の中で“Jesus”という語を23回、“Christ”というご8回用いているという佐藤さんの指摘は、それだけで Dickinson のキリスト教への執着を示すに十分であろう。

結局、白い服に身を包み、わが家にひきこもることになる Dickinson の「白い選択」は、このような苦悩の末に、孤独の中に自分の精神の自由を見出し、詩作の自由を得ようとする彼女の魂（soul）の選択の結果であったと

佐藤さんは考察する。

“THE SPIDER AS AN ARTIST”と題された第2部は、5編の論文からなる。佐藤さんはここに収められた論文を通して、くもが作ったくもの巣は、一つとして同じものがなく、すべてが芸術作品だと考える Dickinson の詩作や創作の源に立ち入ろうとする。“This was a Poet—”で始まる Dickinson の詩の読みから、佐藤さんは Dickinson が抱いていた詩人像を提示し、さらにくもに関する Dickinson の詩のいくつかを引用し、くもの巣が詩作のモデルだと彼女が考えていたことを明らかにする。

“Fountainhead of Emily Dickinson”の章における、“deprivation”こそ彼女の創作の源泉だったという詩人 Richard Wilbur のことばを援用しての、佐藤さんのいくつかの詩の解釈も妥当である。Dickinson が“I dare not eat a Crumb—”とうたったのは、当時正統と考えられていたものに対する反逆もしくは抵抗の姿勢であったと佐藤さんは論ずる。

第2部の最後の章では、これまでの伝記的研究をもふまえて、Dickinson の「愛の概念」が論じられている。“My business is to love”とうたった Dickinson の愛の概念を、彼女の詩や“Master Letters”を引用して、佐藤さんはさまざまな観点から考察し、結論を導き出している。生涯独身を通した Dickinson にとって、愛は次のようなものだったと、佐藤さんは結論づける。

What Dickinson defines as love is not in any sense carnal love, but love which imparts perpetual vivification to one who loves. (p. 100)

第2部にはこの他2つの論文があるが、そのうち“It was not Death, for I stood up,”と副題をつけた第6章は、この副題と同じ文言で始まる詩の詳細な検討を通して、絶望や死を扱った詩における Dickinson のことばの使い方の特徴を探究している。

第3部には“A GLEE POSSESSETH ME”の題の下に、3編の論文がある。佐藤さんの論文は、Dickinson の詩の読みによって展開するものが少なくない。しかし、ここに集められた論文は、Dickinson が20余年にわたって文通を続け、詩の批評をあおいだ Thomas W. Higginson への手紙を中心に、彼女の手紙にも言及しつつ、Dickinson の人間関係のありようを考察した第9章、Emily Dickinson や同時代の女流作家によって描かれている 19

世紀のアメリカ女性像を論じた社会史、文化史的な第 10 章、そして、Dickinson の詩人としての道を辿り、彼女の詩は “a natural wake of the mind pursuing knowledge” (p. 135) と結論づけた伝記的評論といった趣の第 11 章である。

この本の最後となる第 4 部は、“FASCICLES 24 AND 1” と題され、Emily Dickinson が 40 の小束(fascicle)として残した詩の原稿に佐藤さんが接し、それまで依拠していた Johnson 版との差異に驚き、Fascicles に直接取り組み、Johnson 版との対比の上で、Dickinson が意図していた彼女の詩作品の本質、そして適確な読み方を探ろうとした、この著書の中ではもっとも意欲的で、研究者としての佐藤さんの力量が伺われる部分である。Dickinson の Fascicles は、1981 年に Ralph W. Franklin 編纂の *The Manuscripts Books of Emily Dickinson* (2 vols.) として出版されたが、このファクシミリ版を読むということは、日本人にとって古文書を読み解く以上にむずかしいことである。Fascicle 1 と Fascicle 24 の原稿に果敢に取り組んだ佐藤さんの研究に対する真摯な態度と、原稿を解読した英語力—そして文学的理解力—に改めて敬意を表したい。1998 年に Ralph W. Franklin が Fascicles に基づき、新しく編纂した *The Poems of Emily Dickinson* (3 vols.) が出版されたので、佐藤さんにとっても Fascicle 研究がより容易になり、それとともに Franklin 版によって Emily Dickinson 研究がより深まり、進展することと思われる。

ところで、第 4 部に戻るが、第 12 章 “A Study of Emily Dickinson’s Fascicle 24” は、Dickinson が精神的な危機に遭遇しつつも 227 編の詩を生み出した 1862 年という創作力が絶頂を迎えようとしていた年の Fascicle についての研究である。ここでも佐藤さんは Dickinson のいくつかの詩について、Franklin 版と Johnson 版との違いを指摘しつつ、詩の本来の意味を解き明かそうとしている。

続く第 13 章から第 15 章までの Fascicle 1 に関する 3 章は、本書に収録される以前に、それぞれわたしはある学術誌の編集者の 1 人として読んだ。その時は、いささか論点が明確でないように思ったのであるが、こうして一つの研究としてまとめてみると、佐藤さんの論点がはっきりと浮かび上がる。佐藤さんがこの一連で示そうとしたことは、彼女の次のことばではっきりと述べられている。

Approaching Dickinson's canon through manuscript books, away from past assumptions and traditional criticism, appreciation, and understanding can result in an innovative orientation toward her poetry. If we follow Dickinson's fascicle order and study her work with a consciousness of her organizing principle, her poetry is no longer a "fragmentary indicative notation" nor a "telegram," but assumes a structural and thematic unity. (p. 157)

このような視点から、佐藤さんは Dickinson にとって40の Fascicle の "Creation of Setting for Her Meditation"をなすものとして Fascicle 1 を選び、Dickinson の詩の詳細で適確な分析によって、詩人 Dickinson の本質に迫ろうとしている。

第15章で佐藤さんが述べているように、Dickinson にとって詩を書くことは、結局 "pilgrimage to immortality"であり、また "voyage to eternity"なのであった。第14章で、佐藤さんは次のように結論づけている。

As a conclusion it might be confirmed that these forty fascicles are not separate pieces which have been selected arbitrarily for our own reading, but a single work which should be read as a meditator's long narrative of successful conversion. A newly acquired perspective is demanded to solve the riddles of her poems which have so far prevented us from fully comprehending her poetic intention and justly appreciating her artistry. (p. 180)

これは Emily Dickinson 研究の新しい地平を示すと共に、佐藤智子さんが新たな Dickinson 研究に挑戦する宣言ともとれよう。そういう意味でも、本書の第4部はとりわけ重要な意味を持つものである。

本書は全体として見ると、「序論」がないためもあるが、Emily Dickinson の詩は、愛、宗教、芸術といった題材を通して "immortality" もしくは "eternity" への道程を辿ったものという著者の意図が必ずしも十分に読み取れない、という恨みはある。しかし、長年の研究の過程で書きためてきた Dickinson に関する論考を一つにまとめたことを考えれば、それも

止むを得ないことである。そのことは各章の論文の形式にも言えることであろう。

わたしが最後に強調しておきたいのは、佐藤さんが研究者としての強靱な精神を持って、凝縮し研ぎ澄まされた詩句、難解なメタファーを駆使して詩を創作し続けた Emily Dickinson に、長年取り組み、世界中の Dickinson 研究者と肩を並べて研究を続けていることである。また、佐藤さんの研究を可能にしているものに彼女の英語力があることにも触れておきたい。彼女の卓越した英語力は、見事で適確な文章にも見られるが、詩的想像力を理解する英語力なしでは、深遠な思索の産物である Emily Dickinson の詩行を理解することはむずかしい。

近年文学研究において、さまざまな方法が提起されているが、わたし自身は、文学作品の作者が生まれ育った土地や社会、作者が生きた時代の歴史や文化の理解が必須だと考える。その条件を兼ね備えた佐藤智子さんが、研究の次なる段階として、さらなる Emily Dickinson 研究を 1 冊の本としてまとめられる日が近く来ることを期待するものである。